

俳人 成田千空研究会

千空研究

第11号

薔薇いろの火となりストーブ列車発つ

—千空句版画—

藤田 健次



第5句集『忘年』から。津軽鉄道には、以前「水車吟社」という俳句の会があった。前社長の三和満さんが主宰しておられた会で、その選者が千空さんだった。句会後の飲み会が楽しかったようで、千空さんは、白い眉毛と目尻の下がったお顔で、いつもニコニコしながらみんなと杯を交わしていたという。その津軽鉄道の名物は、なんと言ってもストーブ列車。昭和5年に全線開通したが、列車には暖房動力がなく、冬は石炭ストーブで対応した。それが今に続く。

(版画家・会員／八戸市)

目次

薔薇いろの火となりストーブ列車発つ

—千空句版画—

藤田 健次

1

〈回想の成田千空〉

成田千空氏と茨城

矢須 恵由

2

没後10年、注目される俳人 千空

3

「折々のうた」の千空句

4

千空資料研究③

「昭和四十四年日記」より〈下〉西谷ともえ

5

〈作品鑑賞を読む〉⑩

我もまた津軽のお父や暖炉汽車

武田 伸一

6

永住の地五所川原 成田千空をめぐる人々⁽¹⁰⁾

五所川原俳句会 続編

齋藤 美穂

7

千空さんと短歌

10

会員名簿・北極星

12

千空研究会の事業

① 詳細な年譜の作成

② 千空俳句データベースの作成

③ 関係資料の収集

④ 関係者からの聞き取り

⑤ 会報『千空研究』の発行

⑥ 『評伝 成田千空』の刊行

回想の成田千空

成田千空氏と茨城

矢 須 恵 由
やす 恵 由

成田千空氏は、萬緑賞の第一回受賞者（昭和28年）で、しかも第二十八回俳人協会賞（第二句集『人日』により昭和63年）、続いて第三十二回蛇笏賞（第四句集『白光』により平成10年）、さらに第十六回日本詩歌文学館賞（第五句集『忘年』により平成13年）、いわば俳壇三賞を掌中にし、俳壇に揺るぎない地位を確立すると共に俳壇の重鎮として大きな貢献をしたことは誰もが認めるところだろう。そして、萬緑の四代目選者として二十年（昭和63年～平成19年）も務め、多くの後進の育成に尽力された。そのような方の聲咳に私も接し得たことは有り難いことであった。だから、氏との思い出を書くとしたら、幾らでもある気がするわけである。

成田千空氏は、茨城県に萬緑大会のために三回（全国大会二回、同人会一回）お出でになっている。差し当たってその時に纏わることを書いてみようと思う。

一回目、それは私が初めて千空氏にお会いした時であるが、昭和五十二年六月四日から六日にかけて、茨城県大洗町で開催された萬緑全国大会であった。萬緑主宰の中村草田男先生夫妻の出席というまでもない。今から四十年前、記憶も茫洋となつたので、開催県の幹事役として大会運営に当たった関係もあり、保管して来た当時の記録を久し振りに取り出してみた。その大会における吟行

句会の一覧も出て来た。千空氏の吟行句（荒波と荒岩統べて夏日の座／青田千枚海の日の出を度めり）の二句が草田男先生の秀逸に入っていた。因みに、この時、やはり青森を代表する萬緑同人、米田一穂氏も参加されており、千空氏の句（臺の波紋常陸の野山濃ゆきかな）を特選に採っていた。一人三句の出句、二百人の参加であった。初訪（？）にして大洗並びに常陸（茨城）を詠んでスケールの大きい句になっているし、土地の特徴をよく把握していることに感じ入る。千空氏は青森の風土を詠んで定評のあっただけに流石であった。

二回目は、平成元年五月十三日から十四日にかけて水戸市で開催された萬緑同人会への参加の時である。この時の記録は、当時茨城県支部長であった鳩貝実朗氏が当年の萬緑八月号に同人会記として書いている。それによれば、千空氏は、萬緑雜詠選者として俳話を講じている。その前年に、萬緑雜詠欄（樹頭の花）の選者に就任されていた。その時の吟行作品については高点句にはならなかったようだが記録にない。この時期の千空氏を、『千空歳時記』（文芸協会出版、矢本大雪編）に付されている「千空略年譜」に当たってみると、とても忙しかったことが判る。同人総会の終了を待たずに帰路につく列車に乗らなければならない事態になり、私が水戸駅まで、車でお送りしたことを思い出す。そして、その時、何か慌ただしい中、頂いた短冊の句が氏の代表作（大粒の雨降る青田母のくに）であった。この度、そんな記憶があったので、改めて取り出してみた。短冊の裏に書いて置いた私のメモを見て記憶に間違いのないことが判った。揮毫は墨が掠れ、大急ぎの書きぶりのものである。そんな中でも、気配りをする千空氏で

あったのである。

三回目は、平成十五年八月二十九日から三十一日まで大洗町の茨交大洗ホテルを会場に、県北の岡倉天心記念美術館、日本美術館址である五浦海岸を吟行して開催された萬緑全国大会の時である。この時は令閨市子様も御一緒であった。令閨も萬緑同人で鴛鴦作家として活躍されていた。遠くからの来県で前泊されたが、その応対にやはり前泊した茨城の参加者が聞いた話、令閨は夫君が俳句一筋で、ズボンを初め衣服は脱ぎ放しにする程と言われたとか。千空氏にして宜なる哉、であるが、それ程に俳句に集中し、心血を注いでいるということをやったのであろう。

その折、こちらからのお願いであったが、大会運営に当たった茨城県のメンバーに対して快く短冊を書いて下さった。それを手にして同志が喜んでことも忘れがたい。二十人余であった。そんなことも難なくやって呉れるところも千空氏の人柄だ。私が、頂いた短冊の句は、へしうどや金剛不壊の嶺のかず。この句は『天門』に収載されているが、萬緑全国大会長野吟行（昭和62年）で得た秀作で千空の名を高からしめた作。

その後、平成二十五年、再び水戸市で萬緑同人会総会・吟行俳句大会が開催されたが、千空氏の四回目の来県は叶わなかった。

私の郷土水戸で発行されている「ひたち野」の主宰嶋崎専城が、平成十九年八月十九日（俳句の日）に亡くなった。私はその「ひたち野」の副主宰。その同じ年の十一月十七日に千空氏は亡くなった。忘れられるはずがない。私は一度に二人の先達を失ったのだった。

（俳誌「ひたち野」主宰／森の座」同人（萬緑改め）／茨城県那珂市）

没後10年、注目される俳人 千空

今年は俳人成田千空の没後10年にあたり、再評価の動きがある。

3月20日、朝日新聞「天声人語」に、「裏山にゑくぼの日ざし福寿草」が引用された(前号掲載)。

角川『俳句』5月号グラビア「俳人の愛した風景 五能線 成田千空」に、「岩群の生きて波拳ぐ五月かな」がとりあげられた。

5月17日から、東奥日報文化欄で「没後10年、成田千空この1句」(随時掲載)が始まった。

5月21日、県近代文学館で「没後10年、千空を語る」記念イベントが開かれた。

角川『俳句』5月号カラー口絵に

俳人の愛した風景 成田千空「五能線」

……北国の五月は、実感として春だ。桜も桃も林檎も、いっぺんに咲きはじめる。……人も自然も長い冬の眠りから覚めて命の喜びを謳歌する。そんな五月の五能線の景色を、成田千空は「岩群の生きて波拳ぐ五月かな」と詠んだ。ただの岩にも生命力がみなぎる季節なのだ。……

文は、北見市の『ゆきしづく』主宰の音羽紅子さん。

「没後10年、成田千空この1句」

東奥日報で連載始まる

東奥日報の文化欄で、5月から随時連載を始めた。千空の1句と、それにまつわるエピソードで

まとめられている。

これまでに掲載されたのは次の通り。

5/17 夕焼の中の火の玉一掬の地

櫛引 麗子

5/30 大粒の雨降る青田母の故郷

木附沢麦青

6/14 なゝかまどこの道ゆけばみんなある

佐々木達司

6/28 鯛の光点となりてとぶ鴈

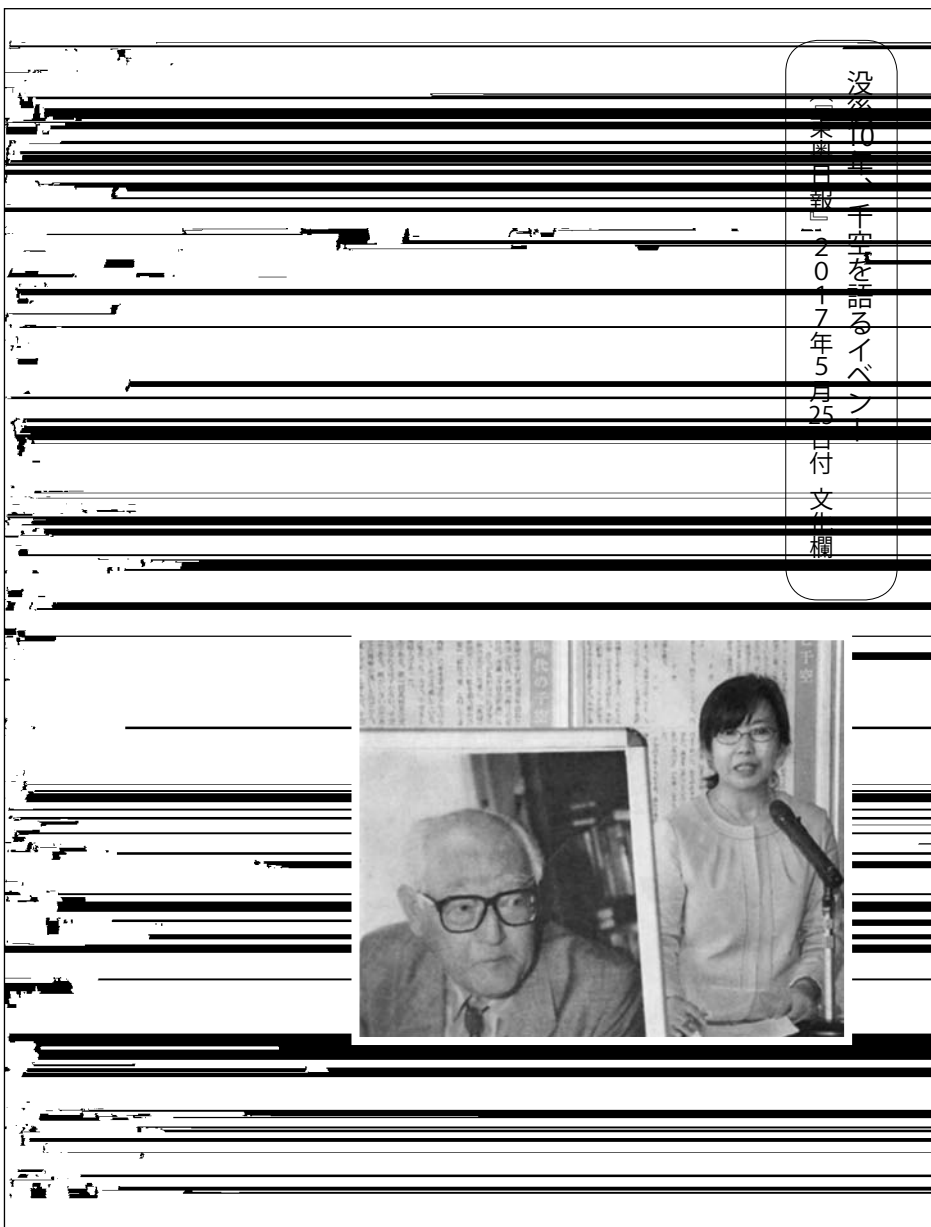
草野 力丸

7/15 酷寒のにはとり紙を喰ひにけり

新谷ひろし

7/26 五月かな泥のひかりの農夫たち

木村 秋湖



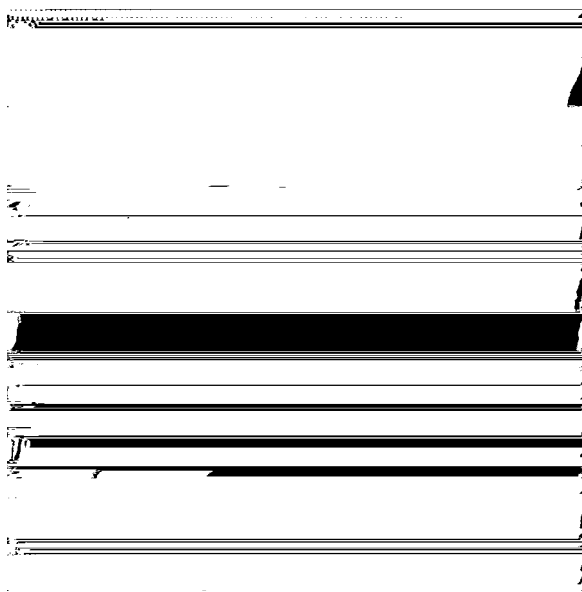
「折々のうた」の千空句

詩人の大岡信さんが4月5日、86歳で亡くなられた。千空さんが亡くなったのも86歳だった。

大岡信といえば「折々のうた」を思い出す人も多いだろう。朝日新聞創刊100周年を記念して、1979年から休載を含めて29年間、6762回執筆した。

第1面の下「天声人語」の左上にあったので、ここを読んでから「天声人語」へ移る人も多かったといわれるほどの、名コラムだった。

古今の詩歌を選び、2000字ほどの鑑賞文でまとめた詩歌選集であった。



1989年3月4日付

これまでの調べによると、千空句は3回掲載されている。「春なれや人来て岩の秀に出づる」は本紙第4号【作品鑑賞を読む】で紹介済みだが、改めて3回分まとめて掲載する。

折々のうた

大岡 信

春なれや人来て岩の秀に出づる

成田 千空

『人日』(昭六三)所収。青空にそびえ立つような大岩。その頂(秀)に人がふと現れた。ただそれだけの情景だが、「春なれや」がこの句を大きく包んで爽快な画面にしている。津軽の俳人。「鷹ゆけり風があふれて野積み藁」「女兒(をみなご)のひとり遊びは雪を摘む」「郭公鳴く眠りの奥の戸が開いて」「手袋の穴から指が出ておのれ」。それぞれの句にどっしりとした明確な風土色がある。

*1989(昭59)年3月4日付

大岡信『折々のうた』8 岩波書店 1992

折々のうた

大岡 信

雪解けて顔のふくらむゴリラかな

成田 千空

『白光』(平九)所収。「雪しろのとどろくところ舞ふところ」という雪解け時の溢れ出る水の勢いを詠んだ句が並んでいる。青森県に住む人の風土色横溢の作だが、一方ゴリラの句は動物園の作だろうか。北国の雪解けのもう一つの表情である。ゴリラの顔が「ふくらむ」という感じ方そのものに、春到来の感じがうまく出ていて、ゴリラを見ると思い出される種類の句だろう。中村草田男門

の有力作者。

*朝日新聞 掲載年月日 不明。

大岡信『新折々のうた』4 岩波書店 1998

折々のうた

大岡 信

鰯群来畑のやうな海となる

成田 千空

『忘年』(平二二)所収。「鰯群来」は産卵期の鰯が大群で岸边に来るのをいう季語だが、それを秋の鰯に転用したのが「鰯群来」。耳慣れない季語で、鰯ほどには俳句でも使われていないだろう。少なくとも私にはこれが初見の季語だった。作者は大正十年生まれの青森の俳人。このような海の光景が、東北地方では時には見られるのだろうか。この句の眼目はもちろん「畑のやうな海となる」。網の中で跳ねる鰯の群れが、まさに鰯畑のよう。

*朝日新聞 掲載年月日 不明。

大岡信『新折々のうた』6 岩波書店 2001

「折々のうた」は、岩波新書版のほか、いろいろな形で各社から出版されているので、重複するものもありますが省略します。

探しています

雪解けて顔のふくらむゴリラかな

鰯群来畑のやうな海となる

の句の、朝日新聞掲載年月日が分かりません。

もし、ご存じの方はお知らせください。また、新聞コピーも探しています。

よろしく願います。

「昭和四十四年日記」より〈下〉

西谷 ともえ

昭和四十四年の夏は大きなニュースが世間を賑わわせ、千空さんもそれに心躍らせた。七月の人類史上初の月面着陸、八月、甲子園決勝戦での三沢高校の熱闘である。前回に引き続き、日記帳からいくつか抜き出してみる。番号と括弧は引用者。

① 7月15日 火曜日 天気 晴

アポロ11号の乗組員、アームストロング、コリンズ、オルドリンの記者会見をテレビで見る。アームストロング船長など、青年の顔をしている。決意と責任と誇りとそして初心。真空の中で訓練しつつして、たったいま世俗の空気の中に現れた感じの違和感があるようである。おもしろい。前途はるかな思い。格子縞のフダン着のシャツも印象的である。スポーツマン。

7月16日 水曜日 天気 晴

アポロ11号、月へ向かって飛ぶ。ゼロからの猛然たる出発。ヴェクトル、その力と方向の破かさ感動する。歴史はすべて動のエネルギーによってつくられる。昔も今も。(後略)

7月20日 日曜日 天気 晴
アポロ11号、いよいよ月に近づく。成功するだ

ろう。

地上から見る教の月はオレンジ色の半月である。

(後略)

7月21日 月曜日 天気 晴 寒暖 暑
アポロ11号月面に着陸す。

1969年7月21日午前11時59分20秒。アームストロング、オルドリン両飛行士が月面に立って活動する場面がありありとテレビに映り出す夢を見るような高次元の現実。ひらかれた新しい世界。発生期の大自然。純粹大陸。300の光体。そこに立つ人間は未だ幻のように見える。

② 8月18日 月曜日 天気 晴

三沢高校、四国の高松商業との決勝戦。延々4時間以上の試合となり18回の延長戦。ついに0対0で引き分け、明日、再試合が行われることになる。甲子園野球史上はじめてのことだという。あまりの熱戦で見ている方がヘトヘトに疲れてしまう。選手。ことに投手はいのちがけであらう。ザンコクな気さえする。純粹残酷。

(後略)

8月19日 火曜日 天気 晴 寒暖 暑

三沢高校、決勝再試合力尽き、4対0で松山商業に破れる。松山は投手2人、交代で投げ、三沢は昨日から太田投手ひとりでガンバリ、とうとう打たれてしまった。正々堂々とガンバリ通した太田投手はまるで苦行を積んだ聖者のように動じなかった。大したものだと思う。

これらうれしいニュースに沸く紙面がある一方、残念な事件も起きた。

③ 7月17日 木曜日 天気 晴 寒暖 曇

弘前高校放火事件の犯人が五所川原〇〇(引用者の判断で伏せ字とする)のセガレであることが判明。晴天の霹靂である。あんなにチャンとした少年がどうしてまた？ むずかしい問題がいっぱいありそうである。先ずこの少年に一切を告白させてみるがいい。貴重な現代の資料となるだろう。(後略)

この少年は幼い頃、貸本屋だった千空さんの店にたびたび来ていた。千空さんはこの事件が現代青年期の心の闇について考えるきっかけとなり、後々まで心を痛めていたと市子夫人は語る。

五所川原俳句会の同志、故平山五朗の句集作りに尽力していた10月27日早朝、対馬鳴月の訃報が届く。28日通夜、30日葬式。葬式では木亘子、常之、水馬、はじめ、清祐、市子、千空、美友、晴川の弔句を詠み上げた。11月1日、平山五朗の句集が完成する。

④ 11月1日 土曜日 天気 晴

早朝、五所川原印刷専務泉潤太郎を訪う。まだ寝ているのを起きて貰う。五朗句集を二冊受取る。一冊を早速水馬に届ける。一番のバスで青森へ出勤した水馬から電話。ビニールカバーは何とかなりそうだという。うれしくてならない。いい句集が出来た！ バンザイ。(後略)

3日には五所川原文化祭俳句大会と平山五朗句集出版記念会を開き、4日には五朗句集を東奥日報文化部長と陸奥新報の船水清に送る。千空さん

の書いた『平山五朗句集』所収の千空さん著の序文「平山五朗の人と作品」によると、平山五朗は前年九月九日未明、脳溢血で倒れ、その日の正午四十三歳という若さで亡くなったという。二日前の句会には参加しており、「思い残すことがあり余る死であった」と綴っている。余談であるが、この句集は五所川原俳句会から出版され、編集はほぼ千空さんが一人で行ったようであるが、日記を見ると頻繁に前田水馬と相談して出版にこぎ着けている。出版後の11月13日の日記には「水馬来五朗句集を17冊も売りさばいてくれ、部下の教師を校長室に集めて五朗句集について講義したという。打っ手が実目的をついている」とあり、本屋の千空さんではあるが、水馬の販売営業力には敵わなかったようである。

十二月、尊敬して止まない棟方志功に会う。

【作品鑑賞を読む】⑩

我もまた津軽のお父や暖炉汽車 千空

近年、「地吹雪ツアー」とともに津軽鉄道の「ストーブ列車」は、冬の観光の目玉として結構人気があるらしい。津軽鉄道は、千空の住む五所川原市から太宰治の生まれた金木を中間点に、津軽中里までを結ぶ二十一キロの私鉄ローカル線である。〈暖炉汽車〉は、観光ブームにのる以前の、乗客のほとんどが地元の人たちで津軽弁の飛び交った頃を思わせるが、今のこととして読んでもおかしくはない。いや、地元の人だけではなく、観光客

⑤ 12月6日 土曜日 天気 晴

棟方志功板画大冊出版記念会へ出席。ホテル青森（青森市）。画集にサインして貰う。会場で宮川翠雨、西沢赤子らと会う。鈴木康生、奥村栄造らと会う。青森県下の名士連中が顔を揃える。その中で棟方志功はやはりズバ抜けた存在であった。「やませ」の話が印象にのこる。志功夫人と息子の巴里爾青年も印象にのこる。至りついた恵みを思う。人よグダめくな。

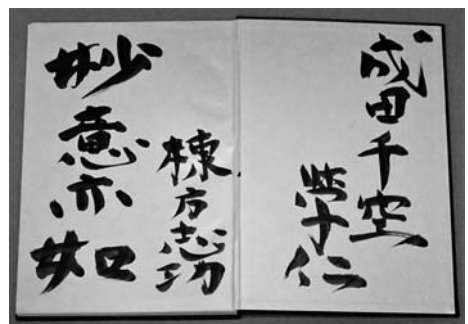
12月7日 日曜日 天気 雨。風寒暖寒し
予定 市子の女学校時代の友達四人集まり、我が家でクラス会。

朝。棟方志功に書いて貰った「妙意亦如」という文句について市子と語る。「如」とはすべてに通ずることだから、要するに藝術の奥義のようなもの。なかなか有難きことばと察せられる。（後略）

からは物珍しそうに見られ囁かれる今の方が、句に屈折感加わり、味わいが増すだろう。それはともかく、この句で大事なのは〈お父〉の読みである。「お父」は、子供の父のほかに、友達の父も「お父」であり、同じ集落の誰某の父も「お父」なのだ。ましてこの句では〈津軽のお父〉である。郷土を愛して止まない男たち。他からはなると言われようと、自分もそういう男の一人だ、と言って憚らない千空。生の胡瓜に味噌をつけて食うという素朴なへ瓜に味噌我はもとより津軽衆も併せて味わいたい句である。（武田伸一）

『俳句』2007年7月号

「棟方志功板画大冊」は、この年に講談社から出版された。このサイン本は生涯千空さんの宝物として大切に保管される。平成20年に五所川原市で開催された特別展示「成田千空展―成田千空 没後1周年を偲んで―」や平成27年青森県近代文学館で開催された企画展「成田千空」でも展



示された。（画像参照）

何冊もある日記の中から偶々取り出した昭和四十四年版についてほんの一部を紹介したが、どのページにも日々の出来事に感じたささやかな気持ち、さりげなくも趣深い言葉で綴られており、読み物のようなものである。締めくくりとして大晦日の日記をご紹介しますこととする。

⑥ 12月31日 水曜日 天気 雪 寒暖 寒

大晦日大忙し。

入荷の山を整理するだけであらう。身辺の清掃などおぼつかなし。雑然たるまゝ年を越すことにする。

さよなら三角明日きて四角。

夜、ゴンボ。ナマス。ナマコ。タコ。アラマキ。カマボコ。ニシメ。クチトリ。オミキ。紅白歌合戦。除夜の鐘。市子有難う。

（県立青森高校教諭・元県近代文学館副室長／青森市）

―永住の地五所川原 成田千空をめぐる人々(10)―

五所川原俳句会 続編

齋藤 美穂

中央と地方

県外の人から「本州最北端の青森県は、中央(首都)に比べて何かと遅れているね」などと言われたら、私は躍起となって本県の長所を挙げ、誤解や偏見を払拭しようとするでしょう。一方で、「故郷を離れてみるとその良さがわかる」というようにそこに暮らしていて案外気づかないことがあるのも事実です。その土地を測るものさしは一本では足りません。

「中央と地方」はいつの時代も新しい問題を抱えています。近年その文化の価値が見直され、地方は独自の輝きを放ち注目されています。こうした状況とは正反対の空気があった時代に、地方のあるがままの姿を見つめ、ひとつの道を貫いたのが俳人・成田千空でした。千空さんは戦後復興の時代に俳句を本格的に志し、地方にいながら風土を核とした俳句文学を問い続け、ついには日本を代表する俳人として認められるようになりました。俳句における数々の業績はもちろんのことですが、千空さんの生き様そのものが地方文化に対するひとつの功績であったと私は信じています。

〈津軽は古くから俳諧の盛んな土地であったわけだが、俳諧学者の視野に入っていない。何故だろう。〉版画家の棟方志功、画家の松木満史、作家の

石坂洋次郎や太宰治――。千空さんは国内外で活躍した郷里の芸術家に共通点を見出していました。中央も地方もない芸術、だれの模倣でもなく作家の内なる衝動から生まれる作品こそが、広い世界を指向する道へ通じていました。千空さんは、現代俳句の作者として地元を据え、津軽の俳史に新たな歴史を刻もうとしていました。中村草田男、加藤楸邨、石田波郷ら人間探求派と呼ばれる中央の俳人たちに新鮮味と現代俳句の可能性を感じ、自らの方向性を見出しました。先達の時代に意識されなかった新しい境地での挑戦が始まったのです。

その後の千空さんが第一回萬緑賞、『現代俳句全集』入集、俳人協会賞、蛇笏賞の受賞など、東北以北初という数々の快挙を成し遂げたことは周知の通りです。六五年余にわたる俳句人生の中で千空さんが上梓した句集は六冊です。実力を世に問うチャンスが限られる中で奇跡のような成果を積み上げたことは、千空俳句への評価がいかに圧倒的であったかを示しています。

千空さんにとって中央と地方の格差は、個々人の意識的な取り組みによって解消されるはずのものでした。そればかりか、中央にはなく地方にあるものを強く自覚することによって成立する俳句像を見据えていました。そこにはもちろん郷里に対する正のイメージも負のイメージも混在しています。どこに住んでいようと「人間個々の領域においてしかとらえようがない」ものをつかみ取ることが何よりも重要なのでした。俳句に一身をかけ、津軽の俳人としての責任を自覚し、自らが突破口となることを密かに期していたと思います。

地方俳壇を大切に

千空さんの高志は、妥協のない句作や選評に表れました。五所川原俳句会は「中央志向」とは距離を置いた実作重視の場で、千空さんも一会員として投句と互選に加わりました。昭和三〇年代の句会に参加した佐藤繁氏(弘前市在住)は、句会での千空さんの存在感や懇親の場で茶碗の酒を楽しむ師の姿を記憶しています。萬緑同人で県俳人の太田鉄杉は、『萬緑』三一年一〇月号に「成田千空」論を発表し、「一見温和な表情に包まれてはいるが、その眼は作品の上では絶対妥協を許さぬものを追求してやまない眼である。千空さんの内蔵するものは、詩性の豊かさや云うよりも求めてやまない情熱である」と述べています。その情熱と直に接しながら、会員らは大会や投稿誌で仲間の活躍があると「五所川原勢が気を吐いた」とばかりに皆で喜びを分かち合いました。「ぼくは多くの作品に対して不満が多い。／しかしぼくは力いっぱいやりたいし、秀れた新しい作家が現れて眼前に光を投じて呉れれば、ぼくはその作家の仕事をやが事のように喜ぶことが出来る」(『萬緑』三二年八月「同類苦言」成田千空)と、純粹に俳句の進歩を願う千空カラーは、五所川原俳句会の持ち味になっていきました。

さて、文学者である千空さんの思考は意外にも科学的な一面があります。私は、「物事を客観的に見て頭の中を整理することで、感情に押し流されない判断をし、強い意志で行動をする」千空さんを知り、俳人以前以後の問題として興味を持っています。夫婦間のちょっとした諍いから世の中の不条理まで、受け入れがたい現実をスマートに

受け入れて対処できる「大人」であることは、千空さんの魅力にもつながっています。

中央と地方の間にある壁を感じた時は「中央の奴らは地方の実態を知らず、地方の奴らは中央の実態を知らないだけのこと」だと日記にしろし、非難めいたことは一切口にしませんでした。しかし、それは多くの思いを飲み込んで書かれた一行であったのかもしれない。千空さんといえども身を震わせるほどの怒りや、やり場のない切なさにふさぎ込む日はありました。

中央のジャーナリストイックな動きを冷静に見ながら、地元で日々俳句に取り組む仲間を支援する千空さんは、三八年四月の『萬緑』に発表した時評「他山石語」に次のような言葉を残しています。

……前衛だの、伝統だの、何々賞だの、一般にはさほどのさわぎもおこらないのであって、人々は人々の納得のゆく方法と態度でもって黙々と俳句を作っている。／人々はただそれが己の分際にあつて俳句であるか身をもって感じ、実作にはげんでいるにすぎない。これが俳句の膨大な裾野を形成する実態であることを、いやしくも一俳誌を主宰するほどの人物は先ず知るべきであろう。

俳壇論争で揺れる組織に、千空さんは地方から一石を投じたのでした。千空さんは後に全国から寄せられる俳句の選者を務めることになりましたが、「黙々と俳句を作る人々」の暮らしを作品の中に見ることを喜びとしました。

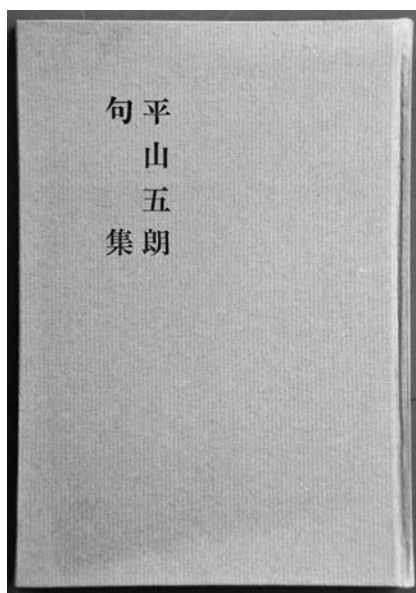
かつての五所川原俳句会のメンバーが残した句集は今も市内の図書館に並んでいます。千空さんとともに歩んだ会員たちが一句もおろそかにせず

編んだ作品集は読み応えのある秀作ばかりです。その中のひとりの俳人を通して、地方の俳壇状況に無関心ではいられなかった千空さんについてお話しします。

平山五朗の死

五所川原俳句会の設立メンバーの一人である平山五朗（本名・幸三郎）は千空にとって忘れがたい俳人です。五朗の出自である平山家は五所川原の旧家で、分家によって枝分かれした家系図には、近代文学の評論家・平山なを（板垣直子）や歌人の平山貞之助らの名前も見えます。千空さんとは津軽詩話会や五所川原俳句会で出会い、俳句の骨法をたたきこまれて文学の資質に磨きをかけていきました。俳誌『暖鳥』や『萬緑』への投句、県下俳句大会などで作品が認められるようになると、三〇年代には活躍する新人として将来を期待する声があがりました。

彼の人生は苦難の連続でした。祖父は貴族院議員を務めた平山浪三郎ですが、戦後五朗の家族は



千空が編集発行した『平山五朗句集』

裸一貫から出直さなければなりません。カリエスを発病して片足が不自由になった五朗は養豚業を営みながら人生の哀歓を俳句に託しました。酒で後悔することも少なくなく、時々行方をくらまして周囲を心配させたそうですが、「本質的にいい奴」で文芸仲間から慕われました。「千空研究」第二号で田中和弘氏が回想されておられますが、芸術全般に関心のある人でもあったようです。「俳句をやらなければろくな事をしないと思える」という理由で詠まれる五朗の俳句について千空さんは「すべて生き身の祈りと願いが句作の由因となっている」と遺句集のあとがきで述べています。

春水に喉波打ちて牡牛なり

遠風やあやつられても歩きまし

藁の春光仔を持つ豚は擦り足に

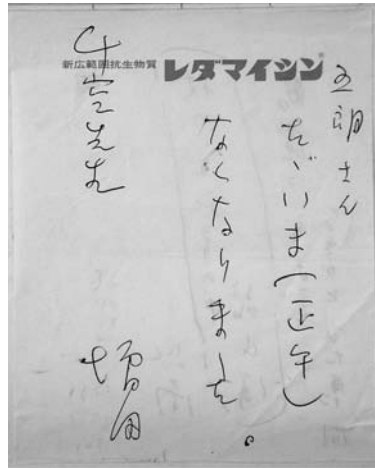
草取りて清しき畝の歪み見ゆ

水蜜と舐りたき無垢子の寝顔

五朗は毎月二、三百句という俳句を作り、それらを推敲し清書したノートを千空の書店に届ける努力家でもあり、それは一〇年以上続けられました。第一回暖鳥賞受賞、陸奥文芸コンクールでの入選のほか、『萬緑』投句欄でも常連になりつつありました。選者としての千空さんは五朗の実力を正當に評価しましたが、厳しく助言することも忘れませんでした。それは五朗の人生にとって俳句とは何であるかを理解し、俳句にかける誠意を誰よりも信じていたからです。

四三年九月、月例句会の帰り道、千空さんは幹部である敦賀晴川、尾崎泉草、平山五朗と町の酒場へ立ち寄ります。暖鳥賞を受賞した晴川を祝い、五朗には少し苦言も出たかもしれません。前月の

句会は五朗の怠慢から開催できなかったと、千空さんの日記に記されているからです。へ五朗は最近どうしたのだろう。自分を見失っているのではないか。五朗が脳溢血で倒れ、急逝したのはその二日後のことでした。妻と幼い子どもたちを遺し、四三歳という早すぎる死でした。彼の生活上の苦悩も知る千空さんは、俳人としての成長を応援し、五所川原俳句会の運営の一助も期待していました。訃報は増田医師（俳人・増田木亘子）から直ちに伝えられ、五所川原の文芸仲間に衝撃が走りました。



増田医師から
千空に届けられたメモ

千空さんから連絡を受けた陸奥新報の船水清は翌日に訃報記事を掲載しています。五朗を評価していた船水は「五所川原の俳人」として記事を書き、その死を悼みました。

五朗めが早亡きを忘れ歌会にも来あがらねえと思ふことある 平山貞之助

汝が子如何に綿飴淡く袋の中 成田千空
五朗はよほど「いい奴」だったのでしょう。文芸仲間の喪失感はいばらく続きました。

三五日法要で五朗の句稿をひと箱分預かった千空さんは、きちんと清書された第三のノートを見

つけます。五朗は生前に句集出版の道筋をつけていたのです。一年以上前から会費滞納のために『萬緑』会員を外されていました。が、萬緑同人の香西照雄からの手紙を読むまで、その事実が千空さんの耳に入ることはありませんでした。「五朗はもうとっくに萬緑に絶望していたのだろう。」今さらながら晩年の五朗の態度が思い返されました。前衛か伝統かという一連の俳壇論争を青森に持ち込みたくない——草田男と行動をとみにせず、現代俳句協会へ踏みとどまっている自身の立場と五朗への扱いについて、千空さんは香西照雄への返信を「かなり慎重に」書きました。「洗練された大人」である千空さんは「津軽の人」でもありました。手紙のあとの日記には思いの丈が綴られています。「それにしても香西照雄は萬緑の大番頭としてもうすこし広い度量をもって欲しいものである。女々しい草田男と細心すぎる香西では困る。」千空さんのこのような感情の表出に私はこれまで出会ったことがありませんでした。

青森の誇り

昭和三十三年、萬緑全国大会が青森県で開催されました。二七年に中村草田男が来県してから六年、青森県での開催は東京の萬緑会員にとって「年来の希望」であったそうです。県出身の同人として活躍する成田千空、川口爽郎を中心に県内の俳人らがこぞって協力し、多くの参加者から感動と感謝の声があがりました。

昭和三十三年度萬緑全国大会の記 成田千空
会場の青森県自治会館は青森駅前の大通りに面し、この辺では一番高い建物である。その四階ホールは街空を越えて陸奥湾の青い沖と

相対している。白い船がいく。又、八月三日はねぶた祭の初日でもあり、年中を通じて郷土色がいちばん濃厚にあらわれる時期であって、その笛太鼓は津軽人の氣を立たせるに充分である。／この日は朝早くから太田鉄杉、松山義春、中村野茨、会津正治、平山五朗、京武久美、須郷かずし、久我てつ、奈良北州ら一騎当千の連中が集って会場を整備してくれたし、暖鳥の新谷ひろしがテープレコーダーを担当してくれたほか、県下の俳人が結社を超越して協力してくれた。はっきり言ってこれは青森の誇りである。

『萬緑』三十三年一〇月

青森の誇り。郷里の人と風土が大会を盛り上げました。その熱気に祖先の血を感じて涙する俳人もいました。「リーダーの方が厳しい修練を己れ丈のものとせず、支部員にも及ばしておられる努力には頭のさがる思いだった」（平井さち子）、「青森の俳友は流派を超えて俳句による文学運動を高めようとしている」（安立恭彦）、「津軽の人たちは現代俳句の在り方が沸騰しても、軽々に巻き込まれない、論理の突っ走りの無力なのを知って居るのだ。一途に作品の場で実践して行こうという気構えだ」（雨宮昌吉）。大会後に寄せられた県外の萬緑会員の感想です。

中央と地方の垣根のない交流の場で県人たちは賞賛され、「青森の誇り」に満たされることになりました。地方の町から県内外へ。千空さんの一念は、雨垂れが石を穿つように成果をあげていたのです。

（千空研究会調査研究員／五所川原市）

千空さん

と

短歌

啄木・牧水から茂吉へ

俳人として大成した千空さんだが、短歌とはどのように関わってきたのだろうか。

「十代の頃から石川啄木と若山牧水の歌が好きである」（『短歌の山河』）というから、同時代の少年たちと同じように抒情短歌から文学を志したのである。

三十代は『アララギ』の斎藤茂吉に傾倒したように、茂吉を詠んだ句が多い。

浜荻や茂吉の歌を師と唱ふ

『暖鳥』1951（昭和26）年11月号

この年の8月、東奥日報社主催、青森県俳句大会に招かれた中村草田男と十和田湖吟行をしており、その時に茂吉の歌と一緒に歌ったのだろうか。

揺るゝ風船瘋癲守の茂吉死す

在らざる茂吉春の造花の眼をあざむく

『萬緑』1953年5月号、『暖鳥』6月号

この年の2月28日、70歳で没した茂吉を偲んだ句。瘋癲守は精神科医の意。

1992（平4）年5月、萬緑みちのく吟行会に参加し、茂吉のふるさとを訪ねている。その時の句が『白光』にある。「山形にて七句」とあり、最初の2句が茂吉を詠んでいる。

言霊の茂吉のくにの泉かな

放屁虫茂吉胸像ありのまま

日記を引用する。

5月31日 日曜 晴

蔵王温泉の国家公務員宿だが、ホテル式の立派な宿である。朝4時すぎに目ざめ、温泉に入る。朝のビールまたうまう、蔵王山は霧に覆われて、溪川の音がきこえる。

朝食後、上山の斎藤茂吉ゆかりの地へ吟行。田んぼの中に茂吉の母を草焼きにした場所があり、歌碑が建っている。金瓶かなめの生家と小学校と記念館を廻る。すべて見ごたえがある。茂吉を読む。参考になる。

12時 そば処でお別れの昼食。山寺駅で解散。

『俳句』2008（平成20）年1月増刊号「自選五句」に次の句がある。

茫々と茂吉の川原秋の声

津軽詩話会での交流・短歌への挑戦

30歳のとき、五所川原に書店を開き、詩人・歌人の仲間とともに津軽詩話会を結成している。1950（昭25）年のことである。詩人も俳人も歌人も一緒に活動していたから、相互乗り入れで作品を作っていた。「仲間の歌人にいわせると俳句的短歌だ」という（『短歌の山河』）。その後、俳句会・短歌会が独立し、会は自然消滅した。

47歳のとき一度だけ、県短歌大会に参加したことがある。1968年9月22日、東奥日報社主催の県短歌大会に歌人の成田連治の車に同乗して参加した。すでに俳人として名をなしていたので照れくさかったのか、乾千太郎の名で歌を提出してから退場している。昔は西北いっぺいと呼んでいたし、

千太郎は千空のもじりだろう。筆名は「西北の千ちゃん」ほどの意である。

それが特別選者山本友一の特選（地）に選ばれた。初心者が「天地人」に選ばれるのは珍しいことである。山本は福島県出身の歌人で歌誌「地中海」の主宰者であった。

そのときの日記にある。さすがに照れくさいのか、おどけた記述である。

1968（昭43）年9月2日（月）曇、晴

夜、東奥日報主催の短歌大会の告知にひかれて、ふと短歌をつくってみる。俳句にくらべると、よほど気ラクにつくれるので、たのしく、つくった歌は全部傑作に思われる。初心というものである。

9月22日（日）晴

成田連治の車で、県短歌大会（青森・東奥日報社）へゆく。同行、西はじめ、山谷、成田連治。

短歌大会の要項を見て、ふと歌をつくりたくなり、われながらじつにいい歌ができたと思い、それを山本友一という特別選者に示してみたくなっただけのこと。山本という人はなかなかハッキリした人である。歌をだし、会場に昼まで居て、途中で退場。照れくさくてかなわない。後できくと、わが名作は案の條、山本選者の特選に入ったという。西はじめが賞品を届けてくれる。賞品は湯上りタオル一枚。名作に対する賞品としてはすこししづらい。ともあれ、吾人は生きているうちに楽しむべきは楽しみ、且つ活躍しなければならぬ。活躍とは何ぞ。

9月27日付の東奥日報には次のようにある。

第22回県短歌大会入選歌

特別選「当季雑詠」 山本友一選

地

五所川原 乾 千太郎
草々の黄ばむが中に野仏の目鼻も分(わ)かぬ
安らぎにあり

【評】「目鼻も分かぬ安らぎにあり」といういい方は説明的。「目鼻も分かず安らぎたまふ」という具合にやってみたくところ。その場合は「野仏の」は「野の仏」にしたい。その方が自然に通る。

同行した歌人の入選歌は次の通り。

「群衆」三ッ谷平治・福川徳一・横山武夫共同選

2点

五所川原 西 はじめ

労組を持たぬ我等はデモ隊を群衆の中にて
じっと見つむる

2点

五所川原 成田 連治

負傷者の運ばれゆきし街角の群れより論(あげ)
つふ声立ちぬ

最後に、歌人への弔句を挙げる。

骨寒といふべき夜にて葬へり(成田連治)

死に際に会へず冷夏の骨に会ふ(柴野宇一郎)

(佐々木達司記)

随筆「短歌の山河」

成田千空(俳誌「萬緑」選者)

昭和二十五年に私が北津軽・五所川原に移住して間もなく、町の詩人や歌人や俳人の集まりが出来て、津軽詩話会と名づけられた。週に一度、公

民館に集って作品の合評をしたり、酒を呑んだり、文学論を交わして、戦後の青森県では最も先端をゆく、詩歌のサークル活動として自負したのであったが、県内の先輩達からは作品面で殆ど認めて貰えなかった。私達としては三年間の活動であったが、相互にジャンルへの関心や実作までも試みて得るところがあった。皆、二十代の柔軟な感性の時代である。俳人の私は短歌をつくって短歌の方がつくりやすく面白かった覚えがある。仲間の歌人にいわせると俳句的短歌だという。「この岸に虜囚いづれば還るべく鷗の糞のいきいきと白し」。それはとにかく、私たちはこの町に一つの文化財を残した。鎮守の森に若山牧水の歌碑を建てたのである。

岩木山と岩木川が美しく見える場所で、周辺には桜の木も多い。青森県で初めての歌碑であった。津軽の大鰐石に仙台石を嵌めて、仙台石の方には牧水自筆の「櫓の鈴戸の面に聞ゆ旅なれや津軽の国の春のあけぼの」大鰐石の方には和田山蘭筆の牧水の歌「ひっそりと馬乗り入るる津軽野の五所川原町は雪小止みせり」が刻まれた。碑の裏には唯「昭和二十七年十一月三日建立」と刻まれてあるだけである。今では誰が建てたのか殆ど知られていない。しかしこの歌碑のおかげで、町の人たちは牧水に親近感を持ち、短歌会もずっと続いている。

五所川原には牧水門の和田山蘭と加藤東籬がいて、蘭菊会という歌会をつくり、明治四十三年に牧水が「創作」を発売した時、二人とも参加した。この影響で牧水系の歌人が大正時代の青森県歌壇の主流を成したといつてよい。牧水は大正五年と十一年に青森に来ており、多くの歌を残したが、

中でも五所川原でつくった「降雪の畦道ゆけば津軽野の名残の雁か遠空に見ゆ」が名歌として知られている。

昭和三年に牧水が亡くなって以来、県内の牧水系の歌会が下火となり、戦争を経てその足跡も忘れられていた時代に、牧水歌碑の建立を発起した私たちは、いったい何を願っていたのであろうか。私自身のことをいえば、十代の頃から石川啄木と若山牧水の歌が好きであるという、近代短歌の最もポピュラーな感性への共感と、直接私たちの風土に触発した歌人の、純粋な抒情を石に刻んでおきたいという願いにほかならない。

当時、東籬はもう亡くなっていたが、山蘭は東京から故郷へ引き揚げてきており、若い私たちの願いに、喜んで協力して呉れた。歌人としても書家としても鬱然たる大家の風貌があり、戦後の日本を見据えている感じの人であった。

私はしかし、ややニヒリステックな東籬の歌の方を好んだ。「歌ふだけ歌へばもはや用もなしわが歌を埋めん根雪の中に 東籬」。山蘭もしかし、晩年になって文語歌を捨てた。「捨てたいも考えてみれば幾つもあるこの肉体もその一つだ 山蘭」。昨年、山蘭に宛てた牧水の書簡が二百通余り、青森の和田家から発見されて、全国的な話題となった。その中に「山蘭のバカ野郎、けんかしたくば出て来い、云々」というのがあり、酔っぱらった自分の姿を描き添えてある。酔筆にしてもすでに師弟の在り方を越えて赤裸々である。山蘭は牧水より年上で、論客であり、しかも酒が強かった。今、山蘭も東籬も、ふるさとの路傍の墓地にひっそりとねわっている。

寄贈感謝

萬緑発行人 中村弓子さん

萬緑運営委員会様

『季題別 中村草田男全句』萬緑運営委員会編 角川文

化振興財団発行 KADOKAWA発売 2017

『萬緑合同句集』5 萬緑発行所 2017

矢須恵由さん（茨城県）

矢須恵由「成田千空論 平和・平安・平明」『WEP

俳句通信』Vol.42 2008年2月14日（コピー）

『天心湖心』矢須恵由俳句四季文庫 2013

浅利康衛さん（青森市）『まほろば』6・7・8月号

齋藤美穂さん（五所川原市）

『俳句』1953～57年、千空関連コピー

『俳句研究』1953～57年、千空関連コピー

原稿を募集しています

会報『千空研究』の原稿を募集しています。

1. 調査・研究に関するもの（4000字以内）

2. 回想の成田千空（2000字以内）

締め切り 第12号は10月末、到着順に掲載します。

送り先 （下段発行所、青森文芸出版あて）

*Eメールで送信くださる場合

sasaki@a-bungei.co.jp

会員を募集しています

会報『千空研究』継続配布をご希望の方は、会員としてご登録ください。会費は年10000円です。

会員名簿（55名）

〈青森市〉

浅利康衛、齋藤光子、高森ましら、

西谷ともえ、野沢省悟、野村正彦、

浜田しげる、未津きみ、吉田州花

〈平内町〉

佐藤陽子

阿保子星、石崎志亥、泉 風信子、

市田由紀子、鎌田義正、後藤 隆、

佐藤 繁、館田勝弘、土田紫翠、

成田圭子、三上弘之

清水雪江、世良 啓

上條勝芳、小林凡石、仁科源一、

藤田健次

〈十和田市〉 日野口 晃、米田省三

〈五所川原市〉 会津明郎、荒閑映子、一戸 鈴、

葛西幸子、木津谷絹子、櫛引麗子、

齋藤美穂、櫻庭利弘、佐々木あさ子、

佐々木達司、高橋睦子、奈良知治、

浜田和幸、松宮梗子、山内ひろ子

〈中泊町〉 外崎文夫

〈つがる市〉 兼平 一子

〈深浦町〉 草野力丸、山本こう女

〈岩手県盛岡市〉 瀬川君雄

〈茨城県那珂市〉 永山憲子、矢須恵由

〈茨城県水戸市〉 糟谷雅枝、小泉光子

〈千葉県流山市〉 藤壘まさ志

〈大阪市〉 川東郁代

2017年会費領収しました（10号掲載まで除く7名）

西谷ともえ、瀬川君雄、川東郁代、会津明郎、

高森ましら、永山憲子、糟谷雅枝、小泉光子

2018年会費領収しました（前納） 矢須恵由

敬称略

☆北極星☆

○東奥日報の「没後10年 成田千空 この1句」がおもしろい。関わりの深かった人が、1句とそれになつわるエピソードでまとめている。文化欄に随時掲載され、これまでに6人が執筆した。

○「回想の成田千空」は茨城の矢須恵由さん。萬緑で親しかった1人で、県外では初めての執筆。これまで知らなかった、茨城での千空が描かれて興味深い。

○巻頭版画が「ストーブ列車」だったので、作品鑑賞を読むは「暖炉汽車」にした。あわせて見てほしい。

○「千空さんと短歌」をまとめた。啄木・牧水から茂吉へは、10年遅れの私も共感できる。短歌大会で「地」に入選して、自己満足している姿が微笑ましい。

○前号掲載の「陸奥野辺地社中芭蕉翁二百回忌追善興行（仮題）」は、千空日記により増田木巨子先生からお借りしたものと判明した。市子夫人の同意を得て、ご家族にお返しした。

訂正 前号の発行日が2018年とあるのは、2017年の誤りでした。お詫びして訂正します。

2017年8月21日発行

会報『千空研究』第11号 非売品（会員配布）

発行 俳人 成田千空研究会

佐々木 達 司

〒037-0004

五所川原市唐笠柳藤巻467

青森文芸出版内

FAX TEL 0173-35-5323

0173-35-8414